

## 年末に起こった実例より（1）

暮れも押し迫った12月29日の夕刻、実際に当社で起こったごくごく当たり前のよくある実例から、「家族に頼らない」ということがどういうことなのかを、一緒に考えてみましょう。

東京都内におひとりで暮らしている90歳男性のAさん。ちょうど2カ月前に、OAGライフサポートの「フルパック契約」を締結していました。学術的なお仕事に邁進されてきた方で、ご結婚はされておらず、お子さんもなく、唯一の身寄りである生涯独身の妹さんは体調を崩して老人ホームに入居しており、簡単な意思疎通しかできない状態です。



Aさんは90歳という年齢とは思えないほど、しっかりとした判断力を有しており、医者や薬にも頼らず、介護保険も使わずに、自立した生活をこれまで送ってきていましたが、最近足腰が弱ってきてしまい、何度か軽い転倒を繰り返していました。

当社としての仕事納めの日だった12月29日の夕刻、緊急対応の携帯電話に着信が入りました。自治体の地区センター職員を名乗る方から「緊急連絡カードを見て連絡しました。Aさんが玄関先で転倒し、右手と額からかなり出血されています。たまたま通りがかった近所の方が地区センターに通報してくださいました。」とのことでした。

この日、不幸中の幸いだったのは、転倒したのが玄関先の屋外でたまたまそこに近所の方が通りかかったことと、Aさんが持っていたカバンにOAGライフサポートの緊急連絡カードがくくり付けられていたため直ぐに当社に連絡をいただけたことの2点です。

OAGライフサポートの「フルパック契約」の会員様には、私どもは「家族」と同等の役割を果たすお約束をしています。その場での対応として、頭を打ったことが想定できましたので、①ご本人の意識があることの確認、②健康保険証の在りかの確認、③救急車の手配のお願いをした上で、当社の手配した職員が現地に駆け付けました。

OAG職員がAさんのご自宅前に到着したとき、ちょうど時を同じくして救急車が到着しました。OAG職員は、地区センター職員からの引継ぎを受け、Aさんの健康保険証をお預かりし、右手と額の真ん中からまだ出血してはいるものの、しっかりと受け答えもでき意識清明なAさんとともに救急車に乗り込みました。

総合病院の脳外科の時間外対応で各種検査の結果、とりあえず問題ないとのこととなり、AさんはOAG職員と一緒にタクシーで帰宅し、事なきを得ました。

このときOAG職員は、発見した近所の方からは「すぐに連絡がつく人がいて良かった」と、地区センター職員からは「我々では救急車に同乗はできない。緊急連絡カードがあって本当に助かりました。」と、救急隊員や時間外対応の総合病院の医師や事務員からは「一人暮らしと聞いて困ったなと思ったけど、あなたみたいな人がついてくれて、帰宅付添もしてくれるなら安心だ」と、口々に感謝されたそうです。

今回は、この実例をもう少し掘り下げて考察してみましょう。

つづく